「幼稚園から小学校へ
―幼稚園と小学校幼年級の真の連結―」
―第二十三巻第四号（一九二三年四月）より―

春、幼稚園や保育所を巣立ち、小学校一年生になる子どもたち。期待に胸をふくらませている。この節目の時を乗り越え、成長を感じ、自信に満ちた生活を送ってほしいと、保育に携わった誰もが願う。しかし、幼稚園から小学校へのつながり―「幼小連携」が教育界で問われ続けているということは、このことがいかに難しい課題かということであろう。

倉橋惣三も『幼児の教育』一九二三（大正十二）年第四号で語っている。「幼稚園と小学校は決して離れて居るものでない……」と記し、米国での試みを紹介しながら、その中心にいるのは子どもたちであり、教師同士は相手に求めるだけでなく、子どもの発達、特性を踏まえた連結のあり方、生活のし方をつなぐことの大切さをもっと考えてほしいとしている。そしてさかのぼると、『幼児の教育』の前身『婦人と子ども』の一九一一（明治四十四）年第七号にも「幼稚園と小学校との課業上の連絡」（佐々木吉三郎）がある。そのころから、その時代その時代で問われ考え続けられている幼稚園と小学校のつながり。この課題はいつまでも続くのだろうか。

（元お茶の水女子大学附属幼稚園　吉岡晶子）

幼稚園から小学校へ ― 幼稚園と小学校幼年級の真の連結 ―

（一九二三（大正十二）年　第二十三巻第四号）　倉橋惣三

一、幼稚園と小学校との関係

小学校と幼稚園との関係と云うことに就て色々の問題がある。しかも、其れが今日必ずしも理想的に滑かに行って居ない問題でありますが、それに就て事実上の解決を考える前に、先ず気のつくことは、今日の我が国で行れて居るような小学校と幼稚園の関係に於きましては、之を材料として幼稚園と小学校との関係を考えて行くと云うことは余程困難であります。従って小学校の方からは幼稚園を責めると云うようなことになり易いのでありますが、其結果として、幼稚園の方の人々は幼稚園の教育は小学校の教育に対して直接の準備をして居るものでないと云う様なことを言って見たりするのであります。私共も時にはそう云う言葉を使うこともある。幼稚園教育は児童生活の一般的の教育をして居るだけのことであって、小学校の予備教育として小学校の準備教育としてして居るものでないと云うのです。其の意味は、我々の幼稚園は今日あるがままの小学校教育法に這入るのに都合の宜いように、誂え向きに、注文に応じて教育をして行く所じゃないと云う斯う云う意味なのです。併し、特にそんなことを言い出す必要のない時、もっと平たく考えて見ますならば、幼稚園の時期から小学校の時期に繋って行くと云うことは当然のことであり、又幼稚園を出た子供は悉く小学校に這入ると云うことも明瞭なことでありますから、幼稚園の教育は小学校の教育に無関係、無頓著だというのは、甚だ奇妙な

ことになるのです。矢張有らゆる意味に於て幼稚園と云うものは小学教育の基礎となり準備となると云うことは極めて当然なことであります。然るに、往々議論が起るというのは、詰り幼稚園と小学校の関係を余りに区別して居ると云う所から起って来る結果でありましょう。実際問題として、子供の個人の発達から言っても、或は子供の教育全体から見通して云いましても、幼稚園と小学校は決して離れて居るものでないのでありますが、併しそれを色々のことで離して居る為に、斯う云う風な問題が起って来るに過ぎないのです。（中略）

四、初年級の革新

教育の方法に就きましては、シカゴの方もコロンビヤの方も、所謂「プロヂエリ（ク）トメソッド」を執って居るのでありますからして、従来の学習的方法でなく暗記的方法でなく、従って幼稚園に於ける方法と、小学校の一二年に於ける教え方とその態度としては違って来ない。勿論四歳の子供のプロヂェクトと七歳の子供のプロヂェクトは其子供自身の能力の発達に依ってプロヂェクトの仕方が、違って参ります。内容的には幼稚園と小学校とは勿論程度が違ったものになって来ますけれども、併し其取扱方としては、矢張或る一つの目的を立てて其目的に向って問題を解決して行く。或は単に抽象的な問題を解決するばかりでなく、具体的解決、即ち製作と云うものをさせて行くと云うようなことに於ては、幼稚園と小学校と云うものは少しも違わないのであります。（中略）

従って抽象的の自負心としては、自分は幼稚園から小学校の生徒になったと云う多少の緊張は起るか知れませぬが、併ながら、我が国に於けるが如く、其の生活の態度それ自身が変って

来る為に、今では自分の興味を主として、自分の好き好みでやって居った生活から、先生を主にした受身の生活に変って来るとか、或は個人的な自由な生活から集団として纏(まと)められた束縛せられた生活をしなくちゃならぬようになって来るとか云うような、本質的な、殊に急劇な変化はないのであります。是は甚だ注意すべき問題じゃないかと思います。詰り我々の小学校のやり方では小学校へ来たと云う自負心から来る緊張よりも、其小学校に於ける生活の変り方から来る所の緊張と云うものが、主になって居る。所が此(この)亜米利加流の此やり方で云いますならば、小学校へ入った為に何も生活それ自身を変えて一層鉢巻をしなければならぬ、一層襷(たすき)を固くしなければならぬと云う意味の無理な緊張はない。唯(ただ)自分は兄さんになった、弟と云うものが下に出来て兄さんになったと云うような人間的自負心から来る所の緊張が起るだけです。少くとも内的緊張は起りましょうが、外的の緊張は起すと云うことはないのであります。

斯う云う風な形に於て小学校の幼学年級が段々幼稚園と云うものと其関係が密接になって参ります。今日我国では、幼稚園から来たものは小学校に於ける学習態度の準備が出来て居ないと云うので非難されたりして居る。詰り、受動的注意が足りないとか、集団的におとなしくして居ることが足りないとか言って非難されたりする。併し其小学校の幼年級に於ける生活そのものが、其学習的態度と云うものそのものが変って仕舞って、矢張幼稚園でやって居ると同じようなプロヂェクトの生活、自分の目的を自分で解決して行く、或は具体的の製作の生活が本体になって来れば、予めそういう生活態度を幼稚園でならされて来たものは、即ち其の小学校の生活に準備されて居るということになる。此処に始めて、幼稚園と小学校との本当の連結がつく訳でありますまいか。